

# 音楽教育とあそびに関する一考察

## A Study of the Music and Play in Education

松 下 允 彦

Yoshihiko MATSUSHITA

(昭和55年10月11日)

### I. はじめに

今までの日本の音楽教育は、「音楽性を培うこと」、「創造性を養うこと」、「情操を高めること」等を目標として行なわれてきた。しかし残念ながら、「音楽とはなにか」についての正しい見解が教育界の現場まで浸透しきっていなかったのではないだろうか。そのため、教育の場において、能力偏重・つめこみ・差別・切り捨て等といった切実な問題を生み、その結果、音楽からも落ちこぼれの現象が現れてきている現実がある。そして、そこでは「音楽的能力や才能がない」、「努力が足りない」といった子どもに矛先を向けた評価を与えただけで片付けられているのである。

そこでこれらを反省し、音楽をもっと本質的に捉え、「音楽をすべての子どものために」<sup>1)</sup>とか「音楽はあそびである」<sup>2)</sup>といった見解が主張されてきている。これらは音楽教育を今までとは別の方向から追究し、音楽の本質をふまえて、発展させようとする立場である。すなわち、音楽は、あそびのように誰もが苦勞なく、楽しんでできるものであるというのだ。すべての子どもたちが音楽の喜びを得られるようにするのが、音楽教育の目標であり、とりわけ、その初期の段階においては、音楽とあそびを積極的に結びつけるべきであるというのである。

そこで、この小論では、あそびと結びついた音楽教育の価値を考察しながら、現在の教育実践の場において、あそびをどのように子どもたちの音楽教育に生かすべきかを、実際に実験的授業を行なったうえから検討していきたい。

### II. あそびと音楽教育

#### 1 音楽教育の一つの方向

従来、教育界においては「あそび」という言葉は避けて通るべきこととされてきた。つまりあそびは休み時間に行なうものであり、あそびと学習のけじめをつけることが、学校教育の目標の一つになっていたように思う。従って、教育の名において、あそんだり、あそばせたりすることは、ほとんど考えられなかったのである。それが、ここ数年前から、音楽教育（特に低学年）におけるあそびの重要性が多方面から叫ばれるようになってきた。

新学習指導要領に基づく、新しい音楽の教科書においても、学習の中のあそびの要素は非常にふえてきた。たとえば、多色刷りのページや、マンガ的な、あるいは絵本的なさし絵が多く

なった。内容面でも、あそびながら歌うわらべうたがふえてきた。

そして、「がっきあそび」、「リズムあそび」等のように「～あそび」という言い方が非常に多くなっている。加えて創作の領域においても、即興の面に重点を置きながら「鳴き声あそび」、「ふしあそび」のように、あそびと結びついているのが目立つ。

しかもこれらのあそびは、音楽科の学習領域だけに見られるものではなく、国語での「ことばあそび」、理科での「しゃぼん玉あそび」、体育での「水あそび」等のように、低学年のほぼ全教科にわたって取り入れられているようである。

このように「あそび」が多くとり入れられてきた背景には、概念学習よりも体験学習を、訓化教育よりも解放教育を<sup>3)</sup>、専門教育よりも育成教育を<sup>4)</sup>、文化財中心の教育よりも人間中心の教育を<sup>5)</sup>といった、従来の教育のあり方に対する反省があり、今後の児童の学習活動にはあそびは必要不可欠なものであろうというように、あそびの重要性がとわれてきていることが考えられる。

## 2 あそびの価値

そこで、このように音楽教育に取り入れられてきたあそびについて、「解放」、「興味・関心」、「熱中」の3つの特徴から、その価値を捉えてみた。

### ① あそびは子どもの心を解放する。

あそびは無条件に心を解放してこそ、あそびなのである。何かと束縛の多い子どもたちの生活において、あそびだけは子どもの心を解放してくれるのである。たとえば、失敗できない、はずかしい、こわい、うまくやりたい、ほめられたい等の不安感、恐怖心、防衛心等といったものとも無縁でいられるのである。あそびは、このようないっさいの束縛を解放する要素を持っている。また、心を無条件に解放するということは、全てを受け入れることにも通ずる。

### ② あそびは興味・関心を備えている。

教育においては、子どもたちにいかにして興味・関心を持たせるかが重要な問題となる。「子供の興味・関心は、授業の出発点である」<sup>6)</sup>とも言われる。興味・関心は、始めは持っていないくても、教師のなんらかの働きかけによって呼び起こされるものであろう。たとえば、何度も同じことをくり返しているうちに好きになってくる例がある。その成果は教師の指導技術や教材の構造等によるのである。しかし、あそびは始めから興味・関心を備えているといえる。それゆえに子どもは、ただ単にあそびというだけで興味・関心を示すのである。したがって教師は、指導過程や教材構成にあたって積極的にあそびを取り入れることが考えられる。

### ③ あそびは子どもを熱中させる。

心を解放し、興味・関心を示せば、当然それに熱中することになる。熱中とは、他のなにかを犠牲にしてまでも一生懸命になることをいうのであるが、なぜそこまで熱中するのかといえは、そこには、何かを創り出したり、やりとげたりする喜びやおもしろさがあるからである。このように、子どもが自発的、意欲的になり、創意工夫することや熟練することの喜びを得ることとなって現われてくる熱中こそ、教育的に意味のあるものである。

以上をまとめてみると、子どもたちが生き生きと(のびのびと)とりくむことができるのは、心が解放されたときであり、子どもたちが喜んで(楽しく)とりくむことができるのは、興味・関心が湧き出たときであり、子どもたちが自らすすんでとりくむことができるのは、熱中するときである。この熱中が、自発性、自主性を育て、意欲を發展させ、また自尊心や競争心を生む原動力となるものである。ここに「あそび」のもつ大きな価値を見出すことができる。

### 3 あそびの音楽的価値

「いわゆる「あそび」は、目的を持たない、まったく「自由で任意の活動であり、喜びと楽しみ之源である」<sup>7)</sup>と言われる。これはあそびについての文であるが、「音楽はあそびである」<sup>2)</sup>という見方から、上の文の「あそび」という言葉と「音楽」という言葉を入れ替えてみると、まさに理想的な音楽教育がうかんでくるのである。音楽があそびであるなら、それはだれにでも苦勞なくできるのである。またあそび自体に目標がないので、指導の必要が無いと同時に評価の必要もないのである。ところが、あそびはそれ自体に目標はないが、努力するのを感じさせる。努力して上手になったほうが、よりあそびがおもしろく、楽しくなるからである。これは前述の「あそびの価値」での心の解放、興味・関心、熱中の過程で自然発生的に生まれるものである。

さて、あそびそのものが音楽というか、音楽とあそびが全く一体となっているとも言えるものが「わらべうた」であろう。したがってわらべうたは、子どもたちの純粋なあそびとあってよいであろう。このあそびの手段としてうたうわらべうたが、音楽的諸能力をいかに養うことができるかが、いまや世界中の音楽教育者に注目されている。すなわち、子どものあそびであるわらべうたが、もっと高度に複雑になった「大人の音楽文化に発展する基礎が、子どもの遊びの歌の中に豊富にあって、それに支えられた形で芸術音楽がある」<sup>8)</sup>と言われているのである。

### 4 教育的あそびと音楽的価値

#### ① 教育的あそびの背景

上述のように、わらべうたの価値が叫ばれると、当然わらべうたの研究書物が出版され、音楽教育の研究会等で討論され始めてきた。また、教科書にも多くのわらべうたが取り上げられるようになった。しかし、わらべうたを授業で扱ったという話を聞くのはまれであるし、子どもたちが授業中に、歌いながらまりつきやなわとびをしてあそんだという話はあまり聞かない。私自身、わらべうたを教材にした授業を見たのは、リコーダーの初歩の段階で、左手の指使いの練習曲として扱っていたものだけである。

わらべうたは、あそびと音楽と動きをともなったものであると言えよう。これに非常に似かよっているものに、コマーシャルソングや流行歌等があげられる。当然これらは、本質的にわらべうたととは異質のものであるが、あそびと音楽と動きをともなうという点では非常に共通している。また、音楽的諸能力を育成していくであろうという事が叫ばれている点でも同じであるし、教材としての価値が認められて、教科書等に取り入れられていることもある。しかし、これらもまた、わらべうたと同じように、学校で教材として扱われる機会は非常に少ないようである。

それでは、学校でこれらはなぜ教材となり得ないのだろうか。それは、わらべうたにしろコマーシャルソングや流行歌にしろ、それらがあそびであるためである。またそれは、歌唱教材としてだけを授業でとり上げ、あそびや動きをともなうことを無視してしまうことにもよる。本来あそびは自由で任意の活動である。これだけでも指導とは結びつきにくいのに、ただ単にあそばせるのでは授業は成り立たないと考えられているためであろう。したがって、あそびに具体的な教育的意図を持った目的を持たせ、その評価を前提にした授業を構成しなければならなくなってくる。

そこで、あそびと音楽教育を考えると、最終的には2つの方向に分けざるを得ない。すなわち、いわゆるあそびと教育の場で扱う、いわば教育的あそびである。もっとも、この両者は本来区別すべきものではないし、教育的あそびという言葉を用いるべきではないかもしれない。

しかし、現在の授業構造のように、指導の目標と、評価を中心に組み立てていく上では、いわゆるあそびは前述したあそびの性格上、指導の目標にはならず、その評価もできない。そこで、あそびの教育的価値をとり出し、応用するという意味で、教育的あそびという言葉を用いる。

## ② 教育的あそびの音楽的価値及び目標

すでに述べたように、教育的あそびとは、そのあそびをさせることによって、子どもにある能力を身につけさせるという、目的を持ったあそびをさす。わらべうたやコマーシャルソング等を歌ってあそんでいるうち、自然に音楽的諸能力が身についていくことはあり得る。しかし学校音楽教育の現状からみると、このような長い目でみた目標ではなく、1時間ごとの目的を持った指導を考えざるを得ない。しかし、この目先の目的は、子どもたちが教師によってあそびを強要されている状態を作り出す危険がある。つまり、目的を強くおし出せば、それはあそびではなくなくなってしまふからである。したがって、教育的あそびのねらいは、子どもたちにできるだけ自由にあそばせる中で、教師が意図した目標を得させることである。

このような教育的あそびを考えると、当然あそびが持つ価値である、解放と興味・関心そして熱中という過程を通らなければならないし、熱中の結果、向上心・追求心・探求心・自尊心・競争心等に発展していくべきものである。しかし、具体的には、たとえば、あそんでいるうちに知らずに弾けるように（歌えるように）になっている。あそんでいるうちに和音の進行のみこみ、他に応用できるようになっている。あそんでいるうちに旋律を覚えてしまったり、その曲の表情をつかんでしまう。といったような指導目標が考えられるであろう。

すなわち、教育的あそびは、本人があそびに熱中しているうちに知らずに教師の目標に達することをねらいとする。

## Ⅲ. 教育的あそびを用いた音楽教育の実践例

小学校低学年の教材における、表現と鑑賞のそれぞれの領域から1曲ずつを選択し、教育的あそびを生かした実験授業を行った結果、非常に有効であるとの心証を得たので報告する。

### 1 こわいろあそび

#### ① 教材について

「森のくまさん」小学校3年生（教科書会社によっては2年生で扱っている。）歌唱教材。

この曲は、森に住む熊と、森にあそびにきた女の子を題材にした物語風の曲である。女の子が森の中で突然熊に出会い、驚くが、それはけっしておそろしい熊ではなく、女の子に逃げなさいと言ったり、イヤリングを拾ってくれたり……。というような話で、一節ごとに熊と女の子がほぼ交互に登場してくる。1番から5番まで通して歌っていくと、なんとなくユーモラスで楽しい曲である。

#### ② こわいろあそびの目的

表現活動の最も重要なおさえとして、表情の変化を感じさせ、表現させることは、難しいが大事なことである。その指導に「森のくまさん」は非常に適した教材である。なぜなら一節ごとに登場人物が変わるため、表情も一節ごとに変わったものになるからである。そこで、めまぐるしく変化する表情を、的確に把握させる方法として、こわいろあそびを考えてみた。

一般には「この節は熊を思い出しながら歌いなさい」とか、「ここは女の子になったつもりで歌いなさい」といった指導が行われるが、「情景を思い起こして」という指導はあまりに抽象的であり、的を得た指導にならないことが多い。つまり、情景を思い起こしているかどうか、

あるいは、思い起こした情景がそのまま素直に表現されているかどうかは、はっきり評価できないからである。

そこで、熊と女の子をこわいろ（声色）ではっきりと分けさせる。そして、こわいろあそびをさせながら、これらの登場人物の心がお互いにうちとけて楽しくなる様子を、その変化で表現させる。こうして詩と音楽の表情をより具体的に、リアルに表現させようとするものである。

### ③ 方法と結果及び考察

この曲の歌詞をよく読み、熊と女の子がどういう気持ちで話したり、行動しているかをつかませ、それをどんなこわいろで表現できるかを、考えさせた結果、次のようになった。

ある日 森の中	……………かわいらしい声, 明るい声, 楽しそうな声
くまさんに 出あった	……………こわい声, びっくりした声
花さく 森のみち	……………明るくうきうきした声, やわらかい声
くまさんに 出あった	……………こわい声, びっくりした声
くまさんの いうことによ	……………かわいらしい声, びっくりした声
おじょうさん おにげなさい	……………熊のような声, ちょっとこわい声, すました声
スタコラ サッサッサッノ サ	……………びっくりして 逃げるような声
スタコラ サッサッサッノ サ	…………… " " "
ところが くまさんが	……………ふしぎそうな声, びっくりした声
あとから ついてくる	……………こわい声, すました声
トコトコ トッコトッコ と	……………どっしりした声, どなる声, うるさい声
トコトコ トッコトッコ と	…………… " " "
おじょうさん おまちなさい	……………さわやかな声, ゆったりした声
ちょっと おとしもの	……………だんだんやさしくなる声
白いかいがらの	……………きれいな声
小さな イヤリング	……………やさしい声
あら くまさん ありがとう	……………さわやかな声
おれいに 歌いましょう	……………はずんだ声
ラララ ラララララ	……………スキップの声, ちょっときどった声, うきうき
ラララ ラララララ	……………した声

「おじょうさん」のこわいろの特徴としては、軽い声・細い声・高い声・リズムカルで早いテンポなどによって、明るく、軽快な表情を持っていた。「熊」のこわいろは反対に、重い声・太い声・低い声・ひきずったりリズムにおそいテンポなどで表され、暗く、重々しい表情であった。したがって、熊のこわいろ部分では、音程は下がり、テンポはおそく、リズムは極端に曖昧になってしまった。しかし、それがいかにも熊らしいのである。これは、音楽的表情を表わすために、音楽のある要素を犠牲にしたと考えられる。もし、ここで音程やリズムやテンポを正しく指導してしまったのでは、もはやあそびではなくなってしまう、表情のニュアンスをつ

かませるといふ目的を達成することは難しくなるであろう。

こわいろ自体は、女子より男子の方が声の質に幅があり、表情に多様性があるとおもしろく、女子には熊のこわいろは難しかったようである。しかし、子どもたちが真剣でかつ夢中になって取りくみ、個々の表情を表現することに熱中し、一人一人が創意工夫をした結果、非常に表情を誇張した表現がなされたことは、まさに子どもの心が解放され、あそびながら、目的を達成したといえよう。

更に、こわいろあそびは、身体反応、身体表現へと発展していった。身体反応については、始めのうちはごく自然な体の動きをしていたのだが、表情の違いによるテンポのゆれや、リズムの持つ表情の違いに反応するようになった。そして、その反応は、同時にそれらの表情を表現するようになったのである。すなわち、表情を表わしている音楽の要素をコントロールするようになったのである。

また、身体表現は、表現の具体化にも発展した。熊の登場する場面では四つん這いになったり、熊の鳴き声を入れて歌ったり、また、おじょうさんがお礼におどる場面では、皆で（グループで）輪を作っておどりながら歌うのである。

しかし、身体表現は、ややもすると、それ自体が目的になってしまい、音楽をおろそかにしてしまうことがよくある。だが、この場合は音楽の表情をより具体的に表現しようとするため、必然的に生まれたものであった。つまり、表情を表現する手段として、身体表現を利用したと見るべきであろう。

従って、ここでの身体表現は、あそびが心を解放し、自らの欲求にともなって、自発的な創造活動が生まれたものであると考えられる。

## 2 器楽あそび

### ① 教材について

「かっこうワルツ」 ヨナーソン作曲 小学校2年生鑑賞共通教材

「かっこうワルツ」は鑑賞教材であるが、鑑賞活動を表現活動としての器楽合奏まで発展させようという意図で教材を考えた。

この曲は、教科書では歌唱及び器楽の教材としての「かっこう」と抱き合せの教材として、扱われている。この2曲は、とてもよく似た曲である。具体的には、3拍子であること、3部形式であること、「かっこう」という鳥の鳴き声を素材としていること等が共通点である。従って、この2曲を有機的・統合的に扱うのは、共通点を徹底させる意味で非常によい。しかし、一方が舞曲のワルツであること、擬声音としてのかっこうの扱い方が、一方では弱起であるのに、一方では強起であること等は、2曲を関連付けて指導する際、注意しなければならない。

また、かっこうの鳴き声は昔から多くの作曲家によって、音楽の中にとり入れられてきた。それらの中でも、この「かっこうワルツ」は、最も擬声音の多い、最も楽しく美しい曲の一つである。

### ② 器楽あそびの目的

小学校低学年の表現領域の教材は、歌唱が中心であり、純粋な器楽教材は1曲も見当たらない。せいぜい、打楽器によるリズム伴奏か、鍵盤楽器等によるごくかんたんな和音伴奏程度である。音楽教育の基本は歌唱であるということは、一般に言われているし、低学年の子どもにとって、旋律楽器を扱うことは技術的に難しいことから、器楽教材が少ないのはしかたのないことである。

しかし、鑑賞教材のほとんどが器楽の曲であることを考えると、放っておけない気がする。子どもたちは美しい曲や楽しい曲を聞いたとき、感動し、喜びを感じる。そして、できれば自分でもその美しい旋律を演奏してみたいと思うであろう。今回の実験授業でも、「かっこうワルツ」のピアノ譜をほしいと言ってきた子どもが何人かいた。おそらくその子どもたちは、ピアノ教室やオルガン教室にかよっている子どもたちであろう。しかし、ほとんどの子どもたちの実際に演奏してみたいという夢は、その楽器や演奏能力がないために実現されていない。

たしかに、このような美しい曲を聞けば、だれもが一度は、自分も演奏してみたいと思うだろう。そう思わせることで鑑賞の指導は成功したと言えるのである。また、そう思わせることは、子どもの心に解放があったのであり、興味・関心、熱中があったから、自分も演奏してみたいという気持ちが自然に湧いてきたのである。従って、そこにあそびの本質が存在しているのである。さて、その夢をかなえてやろうというのが、この器楽あそびの動機である。子どもたちに、この曲をあそびで演奏させるのが目的であり、器楽合奏の雰囲気味わせたかったのである。そのために、子どもたちに演奏可能な楽器を与えることが、必要になってくる。

### ③ 楽器について

このように考えてくると、楽器を選ぶ条件は非常に難しくなる。それは次の事を満たさなくてはならない。

- ① 演奏技術がきわめて容易な楽器
- ② 旋律が演奏できる楽器
- ③ 音楽的表現が可能な楽器
- ④ 美しく、魅力ある音色を持った楽器
- ⑤ あそびの欲求にかなう楽器

しかし、このような楽器は見つからなかった。そこで、この5つの条件をできるだけ満たした楽器として、ブーブー笛とかっこう笛を作ってみた。どちらも非常に簡単な、おもちゃの楽器とも言えるものなので、子どもが自分で作る、手作り楽器として扱ってみた。

#### ◎ ブーブー笛

この呼び名は正しい名ではない。子どもたちが喜ぶように勝手につけた名である。実際にはカズー<sup>9)</sup>(カズウ、ハミングモニカ)と呼ばれるもので、アフリカで生まれた楽器らしい。また楽器のルーツと言われることもあるようだが、これに関する文献を見つけることができなかった。現在フォークやディキシー等でこの楽器が扱われているようである。市販もされている。

この楽器の原理は、トレーシングペーパーを口にあてて声を出し、自分の音声と紙の振動音が同時に聞こえてくるものである。ブーブーという音色なのでブーブー笛と名付けた。

#### ● 作り方

音楽の時間に「楽器を使うだけでも遊びがある」<sup>10)</sup>と言われるが、自分でその楽器を作るとなれば、なおさらである。この楽器は、どんな形に作ってみても皆笛になってしまう。したがって、正式なスタイルは無いようである。原則としてはあまり大きな楽器にしないこと。特に歌口部は小さい方がふきやすい。本体は厚紙(画用紙等)で作り、振動体はトレーシングペーパーか薄いセロファン紙を用いる。振動部はあまり小さくしないほうが響きやすいようである。また、振動部は円でも四角でもかまわない、一応、標準的な寸法として、図1のようにしてみた。45mm×15mmの部分が厚紙を切りぬかれ、トレーシングペーパーをはった振動体である。

しかし、これを小学校2年生の子どもに作らせるのは非常に難しいし、この通りに作る意味

図1

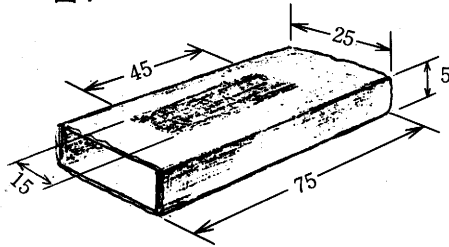
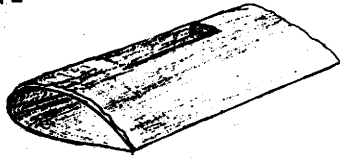


図2



もあまりない。寸法は目測でかまわないし、直方体にしないで、図2のように丸めてもかまわない。これなら2年生にもたやすくできる。

作製にあたっては、すべて接着テープを用いた。本体の接合、振動体の固定は、作ってすぐ演奏したいので、接着テープが便利である。

また、歌口部は唾液でぬれて、こわれやすいが、接着テープを囲きつけておくと、かなり長持ちする。

#### ●楽器の特徴

この楽器は、前述の条件のうち、美しい音色が出せるという点に関しては、全く適していない。いろいろ改良を試みたが、満足な結果が得られなかった。しかし、この雑音の音色が、か

えって子供達の心をとらえたのである。その理由としては、ブーブー笛は「いわゆるあそび」としての要素を多分に含んでいることが考えられる。子どもたちに、うす紙を与えるとすぐ口を持っていき、なにやら音を出してあそぶ。また、口に手をあてて「アウアーアウアー」と音を振動させてあそんでいる光景もよくみられる。このブーブー笛は、これらと非常に似かよっているのである。それではなぜ、このようなことを子どもは好むのかを考えてみると、まず、口びるに伝わってくる振動の感触や、自分の口から発する別の音に、そして、ブーというユーモラスな音色に、子どもの心をうちとけさせ、解放させるものがあるからであろう。

これらの点において、ブーブー笛は子どものあそびとしての遊具（教具）になり、演奏してみたいという欲求にかなう、魅力ある音色になり得たと言えよう。

また、演奏技術が極めて容易で、簡単に旋律が演奏できる楽器であるという点では、このブーブー笛はうってつけであると考えられる。とにかく、歌を歌えさえすれば、だれにでも演奏することができるからである。しかも、音楽的表現についてみても、吹奏楽器としての機能があり、タンギングを用いてアーティキュレーションを表現することができる。ディナーミクの幅や、音域は、歌を歌う場合と全く同じである。

このように、楽器としての機能を持っており、しかも、音色が子どもたちにとって非常に魅力的であり、自らの手でたやすく作ることができるという、大いにあそびの要素を含んでいるものであることから考えると、この教材で扱う場合、理想に近いものといえよう。

#### ◎ かっこう笛

この呼び名もブーブー笛同様、正式な名ではない。空缶利用の笛<sup>11)</sup>とか、おもちゃの笛といったものである。しかし、ここで扱ったかっこう笛は、機能的には市販のものと変わらないであろう。

#### ●作り方

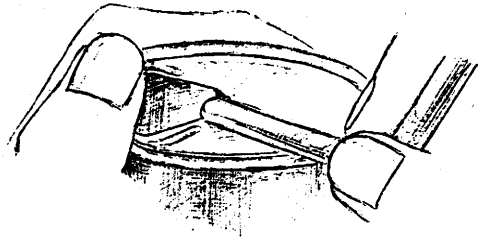
非常に簡単な楽器で、材料を集めるだけで他の準備はいらない。すなわち、ジュース等の空缶とストローだけでよい。なお缶は、のみ口が大きくて、本体はできれば小形のものがよい。ストローは中間部にジャバラのついた、角度を自由に折りまげることができるものが扱いやすい。



発音は、空缶の、のみ口部の穴にストローの先端をあて、ストローを通ってきた息のおよそ半分が缶の外に出て、半分が缶の中に入るように調整する。この角度が難しいので練習を要する。場合によっては、位置をきめて、接着テープや接着剤で固定してやるとよい。

音程を変えるには、缶に、指でおさえる穴をあければよいのだが、穴を正しくあけることは難しいので、かっこうの擬声音としての3度の2つの音は、のみ口部の穴を図3のように左手親指でふさいだりあげたりして、音程を作ることにした。この方が、音程が正確になると考えた。

図3



音を強くする時は、ストローの先をおしつぶして細く平らにし、息圧を強くしてやればよい。また、ピッチは缶に水を入れて調律する。

#### ● 楽器の特徴

演奏技術はやや難しいが、非常に美しい音色を持っている。この楽器も、原理的にはどこでも見かける、単純なものである。ビン等の口に、自分の口をあて息をふきこむと「ポー」という音がする。というような、あそびにささえられた楽器ということができよう。

#### ④ 方法と結果及び考察

以上の2つの楽器を用いた器楽合奏を行なうにあたって、次の3点を、指導の目標とした。

- ① 皆で合奏する体験を持たせる。
- ② ブーブー笛で、旋律A・Bの表情の違いをはっきり区別して演奏する。
- ③ かっこう笛を曲の中でどのように入れればよいかを工夫する。

この教材は、鑑賞教材を自分たちで演奏してみようとするものであるから、旋律を全部覚えていなければならない。ただし、かっこうワルツの形式は、A(a, a)・B(b, b)・B(c, c)・A(a, a)・結尾となるが、B(b, b)の部分は難しいのでカットした。

旋律を覚える方法として、最もすぐれたものに“口ずさみ”がある。しかも、口ずさみは旋律を覚えるだけでなく、「音楽的に十分な意味を持ったシラブル」<sup>12)</sup>で口ずさむので、この段階で音楽の表情が把握できるという長所がある。したがって「かっこうワルツ」をブーブー笛で演奏する場合、タンギングをAの部分では“tu”で行ない、Bの部分は“du”で行なうように指示しただけで十分であった。

なお、口ずさみは「かっこうワルツ」のレコードを聞きながら行なわせ、6回目からはレコードのかわりに、ピアノでBの部分のカットして弾き、それに合せて、シラブルを考えさせながら、行なわせた。

このように口ずさみは、かっこうワルツの曲を覚えたり、曲の表情をつかむために非常に有効であったばかりでなく抱き合せ教材としての「かっこう」の指導にも大いに役立った。すなわち、口ずさみのシラブルで歌ったり、タンギングのシラブル(トゥ、ドゥ)で歌ったりして、旋律の表情をあらかじめつかんでから、歌詞で歌う方法は、「かっこう」のA、Bの区別をはっきり意識させるのにも非常に有効だったのである。

②のかっこう笛を入れる際には、次の点をおさえていた。一つは、かっこうの鳴き声が旋律になっている部分に合わせて、かっこう笛を入れること。もう一つは、Aの部分では弱起で3拍目から入る（譜例1）のに、Bの部分は2拍目から入る（譜例2）ことに気付かせることである。

譜例1



譜例2



この問題は、ただ説明したり、楽譜を見せたりするだけでは、とうてい理解されるものではない。旋律を覚え、ワルツ感が身につき、そして表情のニュアンスを感じることができたとき、はじめて理解できたと言えるであろう。全員の子どもが、この点でまちがわずにかっこう笛をふくことができたのは、このような統合的学習の結果であろう。

「カッコウ」と鳴く、3度の2つの音程については、当然すでに音程感はついているはずであるが、実際には、正確に音程をとることは子どもには難しすぎた。また、缶に水を入れ、ピッチを調律することも、子どもにまかせるのは無理であった。

以上のように、2つの楽器を用いた器楽あそびによって、非常に子どもたちが喜び、楽しく学習できたことは確かである。更に、このあそびを経験した子どもたちの心に、本格的器楽合奏をやってみたいとか、このような曲をオーケストラで演奏してみたい、自分にもいつかはできるのではないだろうか、などと思わせることができたなら、大成功ではないだろうか。それは、あそびによって、音楽する喜びをたかめられたことになり、音楽のもつあそびの大きな目標に到達できたことになるのである。

### 3 あそびの授業をやってみて

「こわいろあそび」及び「器楽あそび」を例として述べてきたが、この2つのあそびの最終的な目標は、表現活動における表情の変化をつけることにある。しかし、同じ目標に向かいをしたものの、そこに到達する子どもの意識は、だいぶ違ったものになっている。すなわち、「森のくまさん」は、「こわいろあそび」に熱中した結果、あそびと共に授業が流れ、発展していったもので、子どもたちが知らない間に、目標に到達した例であり、「かっこうワルツ」の「器楽あそび」は、おもちゃの楽器に熱中し、美しい曲や、すばらしい演奏をなんとか自分もまねしてみたいという、「ものまねあそび」に発展し、A・Bの表情をそれぞれ、まねすることに熱中して、目標に到達した例である。

つまり、「森のくまさん」では、

- 音楽要素は犠牲にはなったが、こわいろあそびによって、いかにも熊らしい表情が表現できた。

- 身体反応から表情を出すために、子ども達の内面から自然に身体表現が生まれた。それは音楽要素にかなった表現でもあった。

「かっこうワルツ」では

- 自分で楽器をつくることによって、より楽器への興味が増し、演奏活動に熱中できた。

- 曲や演奏に対し、興味・関心を示し、自分で演奏することができた。
- あそび的要素を多分に持つ口ずさみによって曲を暗譜させたことにより、的確な表現を行なう上で創意工夫がみられた。
- 鑑賞曲を自分達で演奏することができた。

ということである。これらは、教育的あそびをすることによって、子どもたちに音楽への興味をひきつけたといえる実例である。

#### IV. おわりに

本論のテーマである「あそびをどのように音楽教育に生かすべきか」を検討していく中で、次のような課題が生まれた。

①「音楽はあそびである」<sup>2)</sup> という立場から考えれば、子どもたちを全く手放しの状態で遊ばせておく中で、自らの努力によって音楽性をたかめさせることが理想なのである。しかし、現実には教育的あそびを考慮していかなければならない。そこで、いわゆるあそびがたかめる音楽性と、教育的あそびによって培われる音楽性のちがいについて、今後検討されるべきであると考えられる。

②教育的あそびによって、音楽の表情や内容をより具体的にとらえようとする、音楽要素が犠牲になる場合もありうるが、これは、指導展開の一過程として許容できるであろう。だからこそ教材は標題音楽（歌曲はすべて標題音楽と考えられる）や描写音楽を中心に構成されているのであろう。しかし、これらの音楽に頼りすぎると、音楽を具体的に理解しないと気がすまなくなったり、絶対音楽を受けつけなくなってしまう可能性があるため配慮が必要である。

③いつ、なにを、どのように、どこまで、あそばせるか。教師・児童・教材のかね合いが問題となる。

音楽教育でのあそびの必要性をふり返ってみた。

「遊戯は実際生活の外にある。すなわち必要とか利益とかの領域の他のものである。この点ではまさに音楽的表現・音楽的形式・音楽的生活も同じである」<sup>13)</sup> あそびにしろ音楽にしろ、人間の日常生活の営みの中で必要不可欠なものではない。見方によってはむしろ無駄なものと言ええるかも知れない。確かに、表面的には何も生産せず、何の利益も生み出さず、ただ時間や労力の消費だけに終始する性質も持っているのである。しかし「無駄から生じる有益」もあることは忘れられない。すなわち有益とは根本的には、先に述べてある「解放」と言われるものであると考えられる。解放とは当然心の解放を指す。人はその事によって、何らかの利益をもたらさない事が明らかなき、その結果に何も期待しない。そこにはただ単に「やりたいからやる」といった心の解放が生まれているだけである。これこそ、芸術活動やあそびの根本となっているものなのである。

さらに「あそばない人は人間味がない」「あそばない人間はおもしろみがない」とか、「音楽を愛好する者に悪人はいない」、「音楽は人間の心を美しくする」といった一般論の中にも、あそびと音楽の持つ人間形成における共通性を見出すことができるのである。つまり、一見無駄だと思われる事をやってのける人は、その無駄によって、より崇高な人格が形成されていくという事が考えられるのではないだろうか。

従って、あそびは実際の音楽教育の場に有効に活用されていくべきであり、音楽教育の初期の段階では充分音楽により心を解放し、また、解放を促す音楽を味わわせておく必要を強く

感じるのである。

#### 参考、引用文献

- 1) 須川 久：音楽をすべての子どものために
- 2) 岩城宏之：岩城音楽教室 (p.10, 1977)
- 3) 園部三郎：続下手でもいい音楽の好きな子どもを (p.158, 1979)
- 4) 森脇憲三・富永定共著：音楽の育成教育と専門教育 (1971)
- 5) 伊東 博：人間中心の教育 (p.82, 1977)
- 6) 静岡大学教育学部附属静岡中学校：興味・関心を育てる教材 (p.17, 1979)
- 7) R. カイヨワ：遊びと人間 (p.78, 1970)
- 8) 藤田恵一：入門期の音楽指導 (p.50)
- 9) 服部公一：音あそび (p.68, p.66)
- 10) 園部三郎：下手でもいい音楽の好きな子どもを (p.103, 1975)
- 11) 浅野利治：おもちゃの作り方2 (p.173, p.160)
- 12) 松下允彦・須貝静直：口ずさみによる音楽鑑賞指導法 音楽教育学第8号 (p.22, 1978)
- 13) 柳生 力：感受性はどこえ (p.86, 1974)